

有事における様々な宗教者連携による平和構築 WCRPとICの理念との類似 篠原 祥哲



講演する篠原事務局長(右)

3月23日世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会篠原祥哲事務局長に講演頂きました。以下がその概要です。

【戦争を止められなかった宗教者の反省が原点】

○WCRPは1970年に京都で生まれた。「宗教的理想と平和への責任とにそむいてきたことを宗教者として謙虚にそして懺悔の思いをもって告白する。平和の大義に背いてきたのは宗教ではなく、宗教者である」(宣言文)との反省が原点である。

○世界90カ国で世界最大数の宗教組織の宗教者が以下の使命と役割を持つ

・宗教が持つ社会的資源(信徒、教会、神社、寺等の建物、寄附金)と精神的資源(教え、祈り、共同体意識)を活用し、紛争を解決する 平和を構築すること。

○主な活動: 人道支援 紛争和解 災害復興

【家族で仙台に移住して震災支援活動】

○東日本大震災後の支援活動の際に、被災者から「篠原さんはいつも東京に戻る」と後ろ髪を引かれる声をかけられた。その時「で、篠原どうする!」との「天からの声」(calling)が聴こえ、仙台に移住を決意した。小学生と2歳の子供にとっては移住に葛藤もあったが、子供達も戦い抜いてくれた。

○被災地における復興事業、心のケア事業

(・仮設住宅での布草鞋作り ・ラジオでの宗教者の癒しのメッセージ ・お母さん達の支え合いカフェ・子どもキャンプ・離れた家族への取り組み・高齢者見守り 伝統芸能保存 青少年による芸術活動)

【ウクライナ、ロシア、パレスチナ、イスラエルの宗教者間の和解活動】

○第1回東京平和円卓会議主催(2022年9月、国際IC日本協会後援)



プーチン大統領の戦争を支援するロシア正教、宗教施設多数をロシアに破壊されたウクライナ正教の代表も参加。会議での激しい非難合戦とは別の様々な接点。

○第2回東京平和円卓会議主催(2024年2月、国際IC日本協会後援)

ウクライナ、ロシアに加えてパレスチナ、イスラエル、ミャンマーなどの紛争地域の宗教指導者も参加。

声明文で具体的な行動指針を採択 ・戦争と暴力を強く非難 ・敵味方関係なく、全ての人々の生命の尊厳と神聖さの平等性 ・AI、核兵器などの非人道的な兵器の否定 ・礼拝所、聖地などの宗教施設の保護 ・具体的な行動(人道支援、青年交流、離散家族の再会)

【ICの理念との類似】

最後に篠原さんは、WCRPとICとの類似性について以下のように述べました。

- ・自分の生き方を変えることによって国を作り変える。
- ・社会が変わるためには人の動機が抜本的に変わらねばならない
- ・軍備ではなく、精神、倫理、道徳の再建
- ・旧敵と人間的なつながりを作る機会(サンフランシスコ講和条約、アジア諸国との賠償問題、国会議員、労使間の民主的な和解)
- ・企業の労使、国会議員、皇族、言論界、教育界との協働

実践に裏打ちされた、心にしみる講演有難うございました。



ウクライナとロシアの参加者



中曽根弘文議員(左端)と篠原氏(右端)

【新体制の誕生】

公益社団法人国際 IC 日本協会第 13 回定時総会が、3 月 23 日東京の協会事務所で開催されました。

2023 年度の事業報告書並びに決算報告書が承認され、2024 年度の事業計画書並びに予算書が報告されました(ホームページに掲載)。

そして、新たな役員が選任され、その直後の理事会で、役割分担が以下のように決定されました。

(会長) 藤田幸久、(副会長) 大隈尚子、(専務理事) 道畑剛作、(理事) 岡本あんな、川勝鋼太郎、木村清隆、佐々木淳、成豪哲、宮下暁、(監事) 香川康之、田口ヤス子

また、今回足立憲昭副会長と佐谷隆一監事が退任されました。お二人の長年の貢献に深く感謝いたします。

(なお、大隈理事は、4 月に一身上のご都合で辞任されました)

【改革案の提案】

次いで、MRAハウスからの助成内容変更に伴う今後の対応について、私から以下の報告をしました。

「昨年 9 月 28 日に MRAハウスから、本協会の収支の約 7 割を占める寄付金を 2026 年から停止するとの提案を頂いた。更に、移行期間となる 2024 年度は総額 600 万円、2025 年度は総額 450 万円を支援することも伝えられた。

これに対して理事会、改革構想策定委員会、コスト削減分科会などで様々な検討を行ってきた。その中で、近年の連続経常赤字の原因でもある、学校訪問事業積立資金や国際フォーラム積立資金などの特定資産の目的外取り崩しや、更には基本財産の取り崩しが可能であることが、公益法人協会などから確認された。さらに内閣府では、コロナ禍で存立の危機に直面している多くの公益法人を支援するために「費用を超えて収入を得てはならない」の見直しや、「積立は費用とみなす」を行う法改正案を提出した。

これらを踏まえ 3 月 20 日に MRAハウスを訪問し「現状報告と今後のお願い・提案」を申し上げた。具体的には (1) 40 年前の社団法人設立時に MRAハウスから頂いた 1000 万円の基本財産の取り崩しについての了解、(2) 二つの団体が所有する書籍、資料等のアーカイブ事業を相互補完しシームレス化する共同事業と両団体の共通する国際和解放活動の共同事業、である。

これに対して、MRAハウスからは、(1) については基本的了解を得られたものの、(2) については、今や二つの団体は全く別の存在であり、共同事業を受ける考えはない、とのことであった。

従って、小規模事務所への移転、管理費の削減、特定資産や基本財産の取り崩しなども含めた対応策も織り込みつつ事業運営を続けていくことに尽きると考える。

これに対し、会員の皆さんから、以下のようなご意見が出されました。

○当協会は人件費が高い。これを削ることが大事ではないか。

○若い人が役員になって行動しやすいようにしてほしい。

○制約の多い公益法人を外すことを考えるべきではないか。

○相馬雪香元会長が「出来ることからやりなさい」と言っていた。会員一人ひとりが新会員一人を誘うという地道な活動が大事ではないか。

○今の IC 協会は魅力的ではない。IC ニュースも面白くなくて読む気がしないという人もいる。事業に新味がない。



目玉になるような事業をやってほしい。

○経費削減策として、IC News を pdf で送る等の IT 化を進めてはどうか。

以上の意見に対して執行部から以下のようにお答えしました。

○公益法人の見直しも検討中である。

○交流会(講演会)のメニューを増やすなどして一般市民への働きかけを強化したい。

○IT 化推進でメルマガによる郵送料の節約も検討したい。

○内閣府の指摘を受け、会計方法を全面的に変えた。現在の事務処理内容はボランティアで対応できるレベルを超えている。現状の財務内容では管理費負担が重いのも確かであり、対応が必要である。

橋本徹名誉顧問と矢野弘典名誉会長から以下のご意見を頂きました。

○会員が新規会員を勧誘する際には、セールストークが必要。それを執行部でキチンと用意した上で、会員の勧誘活動に繋げてはどうか。

○組織の維持・発展については、志(こころざし)と財政の 2 点が大事。IC 協会の高い志は下ろす必要は全くない。

財政面では、身の丈に合う活動とコスト削減が肝要になる。役員は、心を一つにして取り組んでいただきたい。

IC 協会も高齢化しているが、これは国際的な問題。各国の対応を参考にすると良い。若い人に受け継いでいくことが大事。共同事業をしようと思うならば、自らが進んで動き出すことが大事。若い人から、面白いと思われる団体であってほしい。

今後は、会員の皆さんの声を聴かせて頂く機会を増やしてお知恵を頂きたく思います。そして臨時総会を開いて方針を確認させて頂くこともあり得ると思います。

皆さんの更なるご支援をお願い申し上げます。



新任ご挨拶

専務理事 道畑 剛作

私は、2年間、監事を務めて参りましたが、先般の第13回定時総会において、理事に選任され、直後の理事会において、専務理事に選定されました。

昨年、2023年10月、MRAハウス様から当協会に対する助成方針の大幅な変更（削減）についての通知を受け、以来、理事会は対応策の検討を行ってきました。新しい顔ぶれによる理事会において、引続きの検討が求められますが、私の所信は、「多くの先輩会員の方々が営々と築いてこられた歴史と伝統ある当協会の存続の方策を求める！」というものであり、藤田会長の主導のもと、補佐役としての責務を全うする所存です。



理事 川勝 鋼太郎

今回は突然にお話が来たので、少なからず驚愕しました。

目ぼしい経歴も海外での経験もないし、また大きな責任を担えるだけの資質もない身ですが、選出いただいた事情から出来るだけ微力を尽くす所存です。

私がICの前身のMRAに触れたのは学生だった頃ですがその後社会人になってからは恥ずかしいことですが五月雨式にイベントに参加したりしておりました。数年前からIC事務所にお邪魔する頻度が比較的高くなりました。この場で披露するのは妥当かどうか判りませんが、ずっと以前に小田原のアジアセンターで相馬豊胤様が夕食後その日の参加者を集めてマントルピースに薪をくべながら‘MRAはもともと家族なのだからこのように集まるのも良いのでは…’と言われたのを思い出します。IC協会も曲がり角に来ているようですが先ず一人でも多くの人々が事務所に立ち寄るようお願いしておきます。

理事 宮下 暁

第13回定時総会において、理事に選任頂きました宮下です。

2019年3月から5年間、事務局長を務めてまいりました。

財政的に大変厳しい状況にある当協会ではありますが、しかめ面をするのではなく、会長をはじめとする役員及び会員の皆様と共に、常に前を向いて明るく努めてまいりたいと思っております。

私にとって、MRA/ICの4つの基準は、一生を通じての遥かな目標ですが、併せて「誠は天の道なり 誠を思うは人の道なり」との気概を大切に、微力ながら、協会の存続に向けて全力を尽くします。



監事 田口 ヤス子

IC協会の向かう所は、平和な世界の構築に向かう事業にあります。人を育てることは、国を支える力に繋がるとして、学校訪問プログラム担当理事として、これまで皆様のご協力の下、その任を終えました。一時、協会活動は、健康を損ね遠ざかっておりましたが、このたび、新たに監事となり、協会財産と理事の業務執行の監査を承ることになりました。

そのため、協会の事業を牽引される理事の皆様が、業務遂行していくときに、当協会の4つの教えを持って、会員の皆様と共にある事を忘れずに、貢献していく姿を厳正に監査して参ります。何卒、よろしく願い申し上げます。

監事 香川 康之

ご縁がありコロナ前の2018年にスイスでコー円卓会議に参加させて頂きました。「静かな時間の中で、個人として何がチェンジを出来るか？」ということを考えるという事の大切さを学びました。

国際IC協会の監事としてこの度就任をさせていただきました。キビシイ事業環境ではありますが、これまで海外で培った挑戦する姿勢で一つでも確実に出来ることを実行してお役に立ちたいと思っております。



退任ご挨拶

国際IC日本協会の皆さま、総会を無事に終えることが出来たことを心から感謝申し上げます。この度、前任の田中専務理事から急遽引き継いだ役割(副会長兼専務理事)をようやく終えることとなりました。その間、コロナ禍を始め、様々な厳しい状況のなか、事務局の協力で毎年の危機を乗り越えることができました一方で、多くの方々に、出逢えて、貴重な教えを受けました。今後は、認証審査の審査員を続けるとともに、好きなマラソン(走友会の仲間)と家庭料理(そば・和食)を頑張っていきたいと思っております。

足立 憲昭

私は、平成28年(2016年)3月から今年3月まで、4期8年に亘って監事を務めました。任期中に皆様から頂いたご支援・ご協力に有難く感謝しております。

私が監事となった8年前は、事業としてIC国際フォーラム、学校訪問、東北アジア青少年フォーラムの3本柱が年中行事として開催されていました。任期の後半は、コロナ禍で事業が行えなくなり、その影響が未だに尾を引いていると感じます。また、任期最終盤になって、MRAハウスからの支援方針の変更という事態に直面しました。この局面で、監事の立場を退くのは大変心苦しいのですが、健康面での気がかりもあり退任を決断しました。

今後もIC協会が、次世代の若者にも魅力ある団体として活発な活動を続けられることを祈念しております。

佐谷 隆一

ソウル通信(第4回) 理事 岡本 あんな

今年2月、韓国議員会館で世界道徳再武装(MRA/IC)韓国本部の総裁就・退任式が行われました。総裁には李柱栄(イ・ジュヨン)元韓国国会副議長が就任し、これまで長年務めてこられた車光善(チャ・グァンソン)総裁は名誉総裁となりました。

式には元ソウル大学総長で国務総理も務められた李壽成(イ・スソン)氏や金振杓(キム・ジンピョ)国会議長、金賢淑(キム・ヒョンスク)韓国女性家族省長官(当時)をはじめ、500人以上が集まりました。さらに祝辞が藤田会長と国際IC推進議員連盟の中曽根弘文会長、また国際ICのGerald Pillay会長から届きました。

李柱栄新総裁は、ICの各国・地域のメンバーが集まれる施設を韓国に設けると発表しました。総裁就任から1カ月半ほどたちますが、全国を回って各地域の支部との関わりを強化しているようです。

私はこの度、国際IC日本協会の理事に選んでいただきました。どのように貢献できるのかについてはこれから模

索していくこととなりますが、まずは日本協会がMRA/IC韓国本部と協力している東北アジア青少年フォーラム(日中韓学生フォーラム)の支援に取り組んでいきます。

日韓の連携強化、また学生としっかり向き合った次世代教育を進めます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。



MRA/ICを推進した人々 市村 清 氏(1900~1968) 中嶋 良樹

長い歴史を持つMRA(現在のIoFC)の運動には多くの人々が係わって来ました。中核になって推進してこられた方々については、今まで取り上げられる機会も多かったのですが、このコラムではMRA運動に啓発されて事業に生かしたり、また多くの協力をされた方々を取り上げたいと思います。

戦後間もない1950年6月スイスのコーでMRA世界大会が開かれました。日本からは67名の代表団が編成されましたが、政界・産業界等からの顔ぶれは今さらながら驚くほど多彩なものでした。

その中に、「人を愛し、国を愛し、勤めを愛す」との三愛主義を唱えて事業展開していたリコーグループの市村清氏(1900-1968)もいました。コーでの経験はかなり印象深いものがあって、コー滞在時の記録は大会の後60日ほどヨーロッパ・アメリカを視察した後で「最近の欧米表情」として出版されました。(興味のある方は事務所にコピーがありますのでお申し出下さい。)

同氏の産業界における活躍は広く知られている通りで、三愛ビルの建設、戦前から縁のあった理化学研究所より名

前が付けられた商品も多く、リコーフレックスは写真の大衆化に大きく貢献しました。その他多くの業績は自身のモットーである‘人の行く裏に道あり花の山’から連想されるように斬新なアイデアのみならず即実現に移る果敢な実行力に拠るものと思われます。

同氏が創設した市村賞は現在も続き、没後50年以上経過しても後世に寄与する志は色褪せません。

